

見えなくなって見えるもの

成長に細部の神経が追いつかない あの時
備えつけられた矯正具はこれからの我が身の不遇を予感させた

目の前の探し物が見つからない 脳細胞が追いつかない
聞きたいものに耳をかたむけ かもす空気に身がうずく
感覚は人知を超えた賜物となり 脳内言語から言葉を編み出す

あの人への怒りと憎しみ その姿を忌み嫌う
振り向けば 我が身を突き刺す鏡に気づく

目の中の細胞組織がおとろえ 視覚の中に三日月の影をおとす
いつまでも消えない影と色彩の味気なさを受け入れながら 日常を過ごす

景觀の一面がこわされ 消えていく
そのときはじめて我が身にとってのかけがえのなさに気づく
友がいなくなったこの世を往けば 我が身の奥底に友がいることに気づく

うばう愛とこがれる恋の 相まみえる恋愛の
彼方に置き去った ふれあうような恋愛の
懐かしみとときめきと 忘れ得ない感情を 胸に秘め

小さな字が見えなくなって 小さな字が書けなくなりながら
食べごとに楽しみを見つけ 新しい栄養を取り込みながら
起承転結のつかない事象の その刹那を味わいながら
我が身の細胞を再び鼓舞する

身が減れば心も亡ぶ
消えゆく定めにあるものに愛しみを感じ
心の中に生きながらえる その魂の語り部にならんことを願う